
消えない思い出

I C H I

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消えない思い出

【Nコード】

N3034Q

【作者名】

ICHI

【あらすじ】

『人生はコンクリートだ。』そんな夢のないことを言う、村上海は部活を退部し、つまらない日々を送っていた。そんなとき女親友の三浦香のお母さんが病気になってしまう。そんな香のことを海は…

最初の涙

青い空、白い雲、虫の声、真っ赤に光る太陽、その炎天下の中で「キンッ」と金属音がする。

赤星中学校の野球部は10年前に一度だけ全道にいったことがある。ここ数年は一回戦敗退。俺たちも半分諦めていた。

「どうせ、野球をやっているプロには行けない。野球だけ真面目にやっても最終的には勉強。俺たちに与えられた人生というものは、大人が作ったただ真っ直ぐなコンクリートの道。途中に結婚とか借金がり晴れたり雨が降ったり、そんなことをしているうちに気がついたらおれの人生は終わるのだろう。」

とか、よく考える今日この頃。

なにも変わらない毎日。自分の人生始まってから少ししかたっていないのに、人生に退屈してきた。

この先どうしようか。

そんなことを考えていたらボールが飛んできた。俺は適当に捕球し大地に送球した。

野球…やめようかな。

俺は、一度決めたら絶対に曲げられない人だ。自分でもそのことはよくわかつている。

またボールが飛んできた。俺は捕球して送球をする前にじっくりボールを見た。

このボールも見飽きたな…そしてボールを大地に返し、決意した。やめよう。明日、退部届だすかな。

そう思った時、高い声が鳴り響いた。

「あとかたずけ!!」

キャプテンの翔の声だ。これで最後だなこの言葉を聞くのは。そして、トンボをかけて、おれの最後のミーティングが終わり、中島先生に相談しに行った。

「先生、俺部活やめます。」

「そうか。わかった。」と言い。俺に退部届の紙を渡してくれた。

止めないんだ。それだけ思っで、かえる準備をした。

その時に野球部の仲間にいろいろ言われたがあまり気にしなかった。そして、まあ決めたし。と思いながら、家へ帰った。

家につき、シャワーを浴びてから親に相談した。

おれの親は「自分で決めたんだったらそれでいい。」

それだけ言っでハンコを押してくれた。

「ありがと」

そんな会話で終わった。

そして、その後にあいつにメールした。三浦香。昔から仲が良くて、いつもなんでも相談に乗ってくれる。だから、退部のことを話した。

普通の人なら、「そんなことしないでいい」とか言っでくるだろう。でも香は違う。

「そっか。自分の決めたことならそれでいい。自分の人生なんだから、自分で決めなきゃ。」

と、おれのすべてを理解してくれた。

たぶん香はやめてほしくなかったんだろうけど、俺のことを考えていっでくれたんだ。

そう思っだ。

「ありがと。なんかスッキリした。」

性に合わないけど、一応お礼を言っでいた。

「うん。どーいたまして。なんか海じゃない！ 『ありがと』なんて言っでちゃってー 笑」

なんて言われてしまった。

おっで、言っのを忘れていたけど、おれの名前は村上。中学2年生の人生観は部活中話してた通り。身長はクラスで前のほう。体重とかまあまあです。顔はよく色んな人に童顔っで言われてる。

性格は人がよすぎる。やさしすぎる。とよくいわれる。あまりうれしくはないのだが…。

自己紹介はこんなもんで、いまメールしているのは香。小学生のころから一緒のクラスで、家もとなりで、たまに一緒に帰るような仲だった。香もやさしいってよく言われている。俺らは同じような性格だし、すぐく仲がいいから「兄妹か！でも香がねーちゃんで海は弟だな」とかよく言われてしまう。でもそんなに気にはしない。

そんな感じだ。まあこれくらいにしないと、メールを返信する。「うるせー。いいじゃねーか。ホントに感謝しているんだから！」「そっか。ねー感謝しているんだったら、香のお願い聞いてくれる？」

なんか、今日の香はいつもと違った雰囲気のメールだった。

「いいよ！何でも聞いてあげる！死ねとか言っても無理だから！笑」

とか少し冗談を言ってみた。いつもなら「じゃあ死んでくれ！」

とか言ってくる香だったが今日は違った。

「そんなこと、言わないよ。あのね、明日一緒に帰ってほしいんだ。」

え？ そんなことかよ。くだらないな。とか思っていた。そして

「別にいいけどーあ、でも退部届出してからな。玄関で待って。んじゃまた明日。」

そう送って、おれは晩御飯を食べて寝た。

次の日、退部届を出した俺は、玄関にすぐ向かった。そこに香がいた。

なんかやっぱ雰囲気が違うー。どうしたんだろう…。

とか思ってたけど、香の高くて柔らかい声で

「帰ろう。」

と言われたので、うん。とうなずいて靴をはき、俺らは歩き始めた。

帰つてるときに退部したこととか、勉強のこととか、色々話した。
そんなことをしているうちに、家についた。

「じゃあね！」

って言つて家の中に入ろうとしたら、香が

「待つて。」

やつぱり今日の香は何かが違う。なに？という感じで振り返る。

その瞬間、香の腕がおれの腰のあたりをギュッとつかんだ。香に抱きしめられていた。

頭が真っ白になったし、胸が締め付けられた。

「どうしたの？」

そういつたけど、香は答えない。よく顔を見たら、涙であふれていた。

おれは子供を慰めるように、香の頭をなでながら

「大丈夫だよ。 いっぱい泣きな、涙が枯れるまでいっぱい泣きなよ。 待つてるから」

と言つて、香が泣きやむのを待つていた。 香が泣いたところを見たのは初めてだった。

泣き始めてからちょっと経ったくらいで香は泣きやんだ。 そうしたら、まだ目が赤くなっている香が話し始めた。

あんまり聞き取れなかったけど、お母さんが病氣になってしまったらしい。

そっか、そっか。 といいながら おれはずっとギュッと香を抱きしめて慰めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3034q/>

消えない思い出

2011年10月8日15時13分発行